

事業名	ウニの食害に強い藻場造成技術の開発(水産基盤整備調査事業)
予算区分	県単(漁港建設費)
事業実施期間	平成12年度～
担当者	(海洋生産技術担当)中西達也
共同研究機関等	
<p><目的></p> <p>本県南部藻場の磯焼け対策として、ウニの食害を防ぐ藻場造成技術の開発のため、岩礁付近の砂地海底に自然石を単体で設置することで藻場を造成する技術開発をおこなう。さらに、単体で設置した自然石の安定性についても検証する。</p> <p><方法></p> <p>(1)木岐地先</p> <p>平成24年11月22日に美波町木岐地先の2地点(沖側と岸側)に各10基ずつ設置した2トンクラスの大型単体礁について、令和3年3月24日に海藻着生状況、基質安定性を調査した。</p> <p>(2)志和岐地先</p> <p>平成26年12月24日に美波町志和岐漁港東の公共藻場造成工区に隣接して設置した2トンクラスの大型単体礁10基、および平成29年12月4日に上記の大型単体礁に隣接するように新たに10基設置した小型の単体礁(平均重量93kg)について、令和3年1月28日に海藻着生状況、基質安定性を調査した。</p> <p><結果></p> <p>(1)木岐地先</p> <p>沖側の単体礁では、主にヒロワカメが生育していた。岸側の単体礁では有節サンゴモ、カジメ、クロメ主体だった。沖側の単体礁はカジメの現存量が少なく、光が多く入ることからヒロワカメの生育が促された可能性が示唆された。沖側の単体礁周辺はウニ類の付着は皆無だった。岸側の単体礁は、砂底面との境にムラサキウニとガンガゼが認められ、単体礁ひとつあたり1～5個の密度だった。海水流動環境の差異によるためと考えられる。</p> <p>(2)志和岐地先</p> <p>単体礁にはカジメ場が着生し、魚類の食害を受けている。食害の程度は、生長点のない茎だけのもの、生長点がかろうじて残るもの、正常なものもある。他には、ヨレモクモドキ、ヤナギモクの着生がみられた。単体礁は台風時と考えられる波浪で若干移動していたが、砂地の海底でよく安定していた。</p> <p>これまでの実証試験の結果から、公共事業の基準より小さい2.4トンの自然石の単体礁であっても、藻礁として有効に機能することが明らかである。</p> <p><今後の課題></p> <p>磯焼けの発生状況は地区毎に異なるので、公共事業における単体礁の実用化に向けて、地区毎の現地実証事例を蓄積する必要がある。</p> <p><次年度の計画></p> <p>継続する。</p> <p><結果の発表・活用状況等></p> <p>公共事業の藻場造成における設計基準等の改訂に資する。</p>	

<主要成果の具体的なデータ>



図1 木岐・沖側の单体礁（令和3年3月24日）



図2 木岐・岸側の单体礁（令和3年3月24日）



図3 志和岐の单体礁（令和3年1月28日）